



対馬丸 通信

発行：(財) 対馬丸記念会
発行人：高良 政勝
編集：対馬丸記念会事務局

Tsushima maru press

平成 18 年 12 月 1 日発行 第 11 号

特集

対馬丸記念館外へと

広がる、新たな平和活動!!

■沖繩尚学高等学校
対馬丸追体験ツアー

■那覇高等学校
テレビドキュメント制作

■第六回特別展
名護にて移動展開催

対馬丸の悲劇 追体験

沖尚高が調査ツアー

62年前の航路たどる

沖繩尚学高校国際交流クラブの生徒二十三人は八月二十日から二十四日まで四泊五日の日程で、一九四四年に沖繩から鹿児島へ向かう途中で米潜水艦の攻撃を受けて沈没、多くの犠牲者を出した疎開船・対馬丸の航路をたどる「疎開船対馬丸・追体験調査ツアー」を実施した。乗員約千八百人のうち学童七百七十人を含む約千四百人が犠牲になつた悲劇を追体験した。



同クラブは二〇四年度から沖繩戦調査を開始。本年度は対馬丸を研究テーマに吉野・上原清さんらに同行し、追体験ツアーを実施した。同ツアーは、対馬丸が沈没した同日同時に沈んだ海域で慰霊祭を実施。近くの島に漂着した乗員を救助したり、遺体を埋葬した地元の人から聞き取り調査した。生徒らは八月二十日に沖繩をフェリーで出発、鹿児島からの帰路に対馬丸の航路をたどる。対馬丸の学童、乗員の遺体が多く流れつた福山一恵さん「友から入目、大和村企画財政課の宮田良二課長（同行入目）らの案内で訪れた生徒らに「奄美大島大村名喜地区の長浜海岸」

丸が沈没した同じ八月十二日夜に同海域を通過した。魚雷攻撃を受けた午後十時十二分には洋上慰霊祭を行い、沈没した同二十三分には鹿児島島の方向に向けて全員黙とうした。生徒のうち五人は奄美大島に立ち寄り、水死した乗員の遺体が多数漂着した長浜海岸や生存者がたどりつた地を訪問した。当時、遺体を埋葬した福山一恵さんに話を聞き、生還した上原清さんが漂着した海岸にも足を運んだ。同島への訪問を提案した赤嶺嘉朗(右二番)は「当時は、沈没した船から多くの死体が流れてきて、悪臭漂う中で島の人が埋葬した聞いた。知らない土地の人なのに、なかなかできないことだ」と話した。

平成 18 年 9 月 8 日『琉球新報』より

「六十一年以上経過し、戦争体験が風化しているが、私たちが若い世代が引き継がねばならない」と語る部長の東江夏奈さん。二年は「対馬丸が沈んだ午後十時に、沈んだ付近を通った」とも暗く、波打っている様子も見えなかったと振り返った。同行した顧問の与座宏章教諭は「対馬丸のあとをたどることで、当時のことを身近に感じることができたことが活動の成果。今後生徒らが体験をどう消化し、自分たちの言葉で発信していくかが重要だ」と強調した。生徒たちは追体験を壁新聞にまとめ、九月二十四日の学園祭で展示する予定。また、県外の高校生との交流でも発表を計画している。

対馬丸記念館が開館して二年目を迎えた今年、館外でいろいろな対馬丸関連の取り組みがおこなわれ、館を中心とした平和活動が徐々に実を結び始めています。なかでも、県内の二つの高校でこの夏取り組まれた活動は特筆に値します。

一つは、沖繩尚学高等学校の地域国際交流クラブが、本年度のフィールド・ワークに對馬丸と学童疎開を取り上げ、洋上疎開の追体験及び慰霊の調査活動を実施しました。独自の船上慰霊祭や、奄美大島の遺体漂着現場の調査活動や生徒の感想等をまとめ、文化祭で展示されました。また、今回の調査活動をコンピュータにまとめ、他校との交流会等でも発表して行く予定だということです。

もう一つは那覇高等学校の放送部が制作した、対馬丸生存者のインタビュー「忘れないで消さないで」が、第53回NHK杯全国高校放送コンテスト沖繩県大会【テレビドキュメント部門】で見事最優秀に輝きました。惜しくも全国での入賞は逃しましたが、立派な作品です。事前調査で、同校在籍者数と犠牲者数がほぼ同じだということから、生徒会も一緒になって一人一羽の千羽鶴を折ったり、壁新聞で対馬丸事件を伝える等、高校生らしい活動も収録されています。

平和の語り部としての、こうした活動が、一過性に終わらず、次へ繋がるよう若い彼等に期待します。

対馬丸体験ツアーをパネル展示

沖繩尚学高校の平成十八年度学園祭が、九月二十三、二十四日の両日同校で実施され、地域国際交流クラブでは、新聞報道された対馬丸追体験ツアーをパネルにまとめ発表しました。

記念館を訪れて事前学習をした成果をふまえた対馬丸事件の概要とともに、生存者や遺体が漂着した奄美大島での現地調査の様子を、



査の感想など、高校生の感性で平和の尊さを訴える立派な展示がなされていました。



対馬丸追体験ツアー

平和・命の大切さ学ぶ

沖繩尚学高等学校二年

嘉数 航

一九四四(昭和十九)年八月二十二日、疎開船対馬丸はトカラ列島の悪石島沖を航行中に、米潜水艦ボーフィン号の攻撃を受け撃沈されました。乗員の大半が犠牲となりましたが、そのうちの七百七十五人はまだ幼い学童たちでした。なぜこのような悲劇が起こってしまったのでしょうか。

私もそれに似た体験をしなければならぬと思う、「疎開船対馬丸・調査追体験ツアー」を計画することにしました。

翌二十三日には、犠牲者や生存者が漂着した奄美大島に上陸しました。大和村役場や地元の方々の温かいご協力で、当時救助活動に参加した方々にお会いし、そのときの様子を詳細にお聞きすることができました。そして、漂着地点や犠牲者の埋葬場所なども確認することができました。

沖繩の人々にとって、沖繩戦の記憶は今でも日常生活の一面でなければならぬはずで。しかし、私たちは本当に沖繩戦を理解し教訓にしているだろうか、そんな問題意識を基に、私たちのクラブでは三年前から沖繩戦に関する調査・追体験活動を始めてきました。今年、「疎開船対馬丸」を研究テーマに選びました。

鹿児島では、沖繩戦を別の角度から学ぶために知覧の特攻隊平和記念館を見学しました。沖繩近海で亡くなった特攻隊員には私達と同年代の人も多くいました。隊員たちが家族にあてたたくさんの遺言には胸が詰まる思いでした。

私たちは、今回の活動を通して多くのことを学びました。戦争は親子の絆を引き裂き、幼い子どもの命まで奪ってしまうむごいものです。改めて平和の大切さ、命の大切さを学びました。そして、沖繩に生きる者の義務として、「対馬丸事件」をはじめとした沖繩戦の教訓をいつまでも胸に刻み、そして発信していかなければならないと感じました。

私たちは、対馬丸記念館のご協力をいただいて、文献や関係者の証言などで対馬丸事件の概要をつかんでいきました。海に飲み込まれていった無邪気な学童たちの悲劇、わが子を失った両親の悲しみなど改めて沖繩戦のむごさを感じました。そして、沖繩戦を本当に理解し、人々に知らせるには、自分た

ちもそれに似た体験をしなければならぬと思う、「疎開船対馬丸・調査追体験ツアー」を計画することにしました。

八月二十日、私たち二十三人のメンバーは、対馬丸と似たような航路を運行するフェリーに乗り込みました。熱気でむんむんしていた対馬丸とは異なり、冷房の効いた快適な船旅でしたが、学童たちがどんな思いで乗船していたか、少し体感できました。

放送部の番組制作がきっかけ

那覇高校生徒会、全校生徒で千羽鶴折りに取り組む。

今年、那覇高校放送部は第53回NHK杯全校高校放送コンテスト沖縄大会の題材を対馬丸に決め制作を開始しました。

ドキュメンタリー制作を前に、記念館を訪れ事前学習を開始した部員が、犠牲者数と同校在籍者数の一致に気付き、それををきっかけに番組内でもふれられているように、同校全生徒による千羽鶴作りが始まりました。

無事折あがった千羽鶴が、六月十七日同校生徒会（会長比嘉久美子）より高良会長へ手渡されました。

同校OBでもある高良会長から平和を願い一生懸命取り組んだ生徒へのねぎらいと感謝の言葉がかけられました。



那覇高校放送部制作「忘れないで消さないで」より第53回NHK杯全国高校放送コンテスト沖縄県大会【テレビドキュメント部門】最優秀賞 受賞作品



番組を制作した那覇高校放送部員と顧問の黒島先生

番組制作にあたって感じたこと

那覇高等学校三年 上原愛都

私たち那覇高校放送部は、NHKの放送コンテストに向けて、対馬丸をテーマに番組を制作しました。

調べてくうちに、那覇高校と対馬丸には関係があることがわかりました。

一番驚いたのは、犠牲者数と今年的那覇高校の生徒数がほぼ同じということです。昨年からは一クラスずつ減っているのですが、この生徒数は今年のみなのです。この事実を知り私たちは「偶然を偶然で終わらたくない。」と思い、より一層番組制作に取り組みました。

制作中一番辛かったのは、生存

者や遺族の方へのインタビューでした。皆さん真剣な表情で語ってくれ、時には辛そうな表情を見せていて、まだ戦争の傷が残っているのだと悲しくなりました。

大変なこともあったけど、得るものがたくさんあった番組制作でした。対馬丸のことをより身近に感じるようになり、戦争について改めて考えさせられました。

最後に、この番組制作にご協力してくださったみなさん、ありがとうございました。

（那覇高等学校放送クラブ員）

第6回特別展

初めての試み、館外展示

対馬丸記念館として、初めての館外展示が去る七月二十九日に、名護市立中央図書館で開かれました。

これは名護市教育委員会主催で行われたもので、対馬丸記念会高良政勝会長の講演『対馬丸撃沈—水に流せない過去—』の一環でロビーホールを利用して展示されました。

發機構、国際海洋環境情報センターのご協力で近隣市町村からも聴衆が訪れ、大変意義のある催しとなり、初めての試みとしては大成功でした。

会場には、名護市遺族会、(独)海洋研究開



遺族・生存者だった、故高良千代さんのご家族から香典返しを頂戴いたしました。

対馬丸の生存者であり、遺族でもある高良千代さんが去る七月六日にお亡くなりになりました。千代さんには館内の証言ビデオにもあるように、生存者・遺族として貴重な証言をしていただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。

また故人の生前からの遺志ですと、九月六日に記念館を訪られた、ご主人高良英三氏と三人の息子さんより、香典返しとして百万円のご寄付を頂戴いたしました。故人の御遺志をついで、記念館の平和活動に役立てますと、役員事務局一同心を新たにいたしました。



記念館運営日誌

□五月二十日

ローターアクトの代表四人が活動報告で来館しました。席上彼等が集めた寄付金の贈呈があり、お礼に記念館ガイドブックを謹呈しなお一層のご理解とご協力をお願いしました。



□六月一日

九州教育委員長協議会の県内の会議開催に合わせ、来沖中の一団が記念館を訪れ、企画展示室において高良会長による講話のあと、館内を視察しました。

事務局より修学旅行での来館に役立ててくださいと、各種資料を配布し対馬丸記念館への理解を深めて頂きました。



□七月十五日

七月八日那覇の日を記念して、十五日に那覇市主催で(独)海洋研究開発機構の海洋調査支援母船「よこすか」と深海調査船「しんかい6500」の一般公開が行われました。対馬丸調査でお世話になったご縁で、対馬丸記念会も共催団体に名前を連ね公開のお手伝いをいたしました。



□八月七日、八月二十一日

こども王国首脳会議(代表山本和昭氏)の徳之島からの豆記者十一名が来館し、記念館内で琉球舞踊を奉納して頂きました。同じく八月二十一日には、沖縄市文化協会所属の同市の子どもたち十一名(引率 副会長 眞境名直子氏他)が来館、慰霊祭を前に琉球舞踊、空手演舞等を奉納してくれました。



□九月十二日

内閣府、原田正司沖縄振興局長が来館されました。原田局長の沖縄視察日程に組み込まれたもので、約四十分高良会長の説明で熱心にご見学頂きました。



□九月二十日

対馬丸遺族や(財)対馬丸記念館の沖縄県における所轄官庁である、福祉保健部福祉課の松川満課長と添盛貞雄副参事が記念館を視察されました。高良会長の案内で、あらためて対馬丸事件について理解を深めて頂きました。



□編集後記

平成十八年度の予算執行の関係で、11号・12号の発行が同時になると言う変則的な発行になりましたが、縦組に体裁を変えて読みやすくしてみました。いかがでしょうか。今年度は後一回発行いたします。

対馬丸通信 第11号
発行 平成18年12月1日
発行人 高良 政勝
編集 (財)対馬丸記念会事務局

財団法人 対馬丸記念会
〒900-0031 沖縄県那覇市若狭 1-25-37
TEL:(098)941-3515 FAX:(098)863-3683
URL:www.tsushimamaru.or.jp/
e-mail:info@tsushimamaru.or.jp